



“しこり・できもの・コブ”は、**腫瘍**と言います。

腫瘍を言葉で表すと難しい表現になりますが…

『体の臓器や組織を構成する細胞が本来備わっているルールに従わず
無目的かつ過剰に増殖し、異常な細胞集団を形成したもの』

腫瘍は体表にできるだけではなく、心臓や消化管などの内臓・骨・血管など
体のあらゆる場所にできてしまいます。

腫瘍には、良性腫瘍と悪性腫瘍の2つに分類されます。



良性腫瘍

まず**命の危険はない**とされています。
転移性はなく、進行速度も遅い
しかし腫瘍の場所によって、
生活の質（QOL）の低下があることから
手術で取り除くこともあります。

例) 脂肪腫 皮脂線種 組織球腫



悪性腫瘍

一言で言うと【**癌：ガン**】です。
リンパ節に近いと転移性が高くなり
切除したとしても再発の可能性が高く
進行速度は様々で早いことが多いです。

例) 乳腺腫瘍（乳がん） 骨肉腫
肥満細胞腫

腫瘍自体は、年齢問わずどの子もできる可能性がありますが
年齢が上がると共にできやすくなる傾向です。

大原則で腫瘍は、**『見た目だけで判断してはならない』**です！



代表的な良性腫瘍【皮脂線腫】

いわゆる“イボ”です。老齢の犬によく診られます。

犬の皮膚腫瘍の中で多く診られるコブの1つです。

見た目は様々で、白色・硬く毛が無い・茎があり盛り上がっているなど…
傷つけてしまうと出血や化膿する可能性もあります。



代表的な悪性腫瘍【乳腺腫瘍】

老齢の避妊していない犬猫がなりやすい病気です。

ホルモン依存性疾患で、発症には卵巣ホルモンの分泌が関係しています。

悪性の比率がそれぞれ犬では約50%・猫では約85%。

乳腺腫瘍の患部は触れやすいため、早期発見が可能です!!



当院でできる腫瘍の診察は**3つ!!**

① 経過観察

定期的に腫瘍の大きさや転移がないかなど確認をしていく

② 細胞診検査

腫瘍に針を刺し一部吸引して、採取された組織を顕微鏡で検査する
しかし、確定診断ではなくあくまで良性か悪性かなどの可能性を診る検査

③ 麻酔下による腫瘍切除

唯一確定診断ができる。全身麻酔をして、手術で腫瘍自体を切除し
切除した腫瘍を外部の病理検査に依頼し確定させる。



犬の体表にできる腫瘍の8割は…良性

猫の体表にできる腫瘍の8割は…悪性

腫瘍の良悪でこのように言われることがあります。

普段から触れ合っている**飼い主様が早期発見の鍵**です！

少しでも気になるコブがあれば教えてください。

